

株式会社 クライフ・ディー・ファースト  
代表取締役社長

## 野澤 和也

「荷物を街から街へ、そして人から人へ運ぶことが私たちの仕事」と語る野澤社長。  
お客様とその先のお客様の笑顔を思い浮かべ、  
送る人と受け取る人の想いの架け橋になるべく、心を込めて荷物を届ける。  
お客様の「ありがとう」という声が、何よりの原動力だ。  
「ありがとう」でつながる想いを大切に、  
「ありがとう」を多くの人に届けることを使命に、これからも走り続ける。

「これからも『ありがとう』でつながり、  
『ありがとう』を届けていきたい」

# 培ったノウハウ、人脈を活かして 多様な運送ニーズに応えていきたい



「強い責任感、人望力を兼ね備えた方。  
今後のご活躍が非常に楽しみです」

志垣 太郎

俳優

special

「まずはこの1年で車両と人材を増やし  
軽貨物輸送で勝負をかけていきたい」

代表取締役社長

野澤 和也

interview



## column | 強い使命感を持って、質の高いサービスを

▼『クライフ・ディー・ファースト』は、関東圏を中心に軽貨物事業のフランチャイズを展開する『KBT-GROUP』に加盟している。同グループは創業者がたった一人で立ち上げ、今や全国で150店舗、約3,500名のドライバーを抱える一大ネットワークに成長した。独自の教育プログラムなど手厚いサポートが受けられるのが特徴で、「運送業ではなく、サービス業」という熱き情熱で多くのドライバーが日々質の高いサービスを提供している。

▼新型コロナウイルスの感染拡大により外出の自粛ムードが広がる中、いわゆる“巣ごもり消費”と呼ばれる新たなトレンドが生まれた昨年。それに伴い、日用品や食料品の宅配ニーズが急増し、軽貨物輸送が果たす役割は大きくなるばかりだ。野澤社長は強い使命感を持ち、ニーズに応え続けていく。

神奈川県川崎市で運送業を手掛ける『クライフ・ディー・ファースト』。同社の野澤社長は業界一筋に豊富なキャリアを重ね、培ったノウハウ、人脈を活かして力強く事業を牽引している。本日は、そんな社長のもとを俳優の志垣太郎氏が訪問。これまでの歩みやその人柄、そして事業にける熱き想いに迫った。

——早速ですが、野澤社長が事業を立ち上げられるまでの歩みから順にお聞かせ下さい。

ここ神奈川県川崎市で生まれ育ちました。父が少年野球の監督をしていたこともあり小学生の時は野球、中学校からはサッカーに傾倒していましたね。学業を終えてからはフリーターを経て、東京の運送会社に就職。高校時代にビザのデリバリーのアルバイトをしていた経験を活かそうと考えたんです。また、当時はどこかで「東京で働きたい」という憧れもあったような気がします。ですから当初は、一生の仕事にしようという気持ちはあまりありませんでした。ただ、それか

ら25年経った今でも、こうして運送業界に身を置いているわけですから縁があったのかもしれないね。

——社長にとっては天職だったのでしょうか。予てから独立心をお持ちだったのでしょうか。

いえいえ。それはありませんでした。入社当時は同年代の社員が多く、休み時間にはサッカーを楽しむなどとても居心地の良い職場環境だったんです。その中でキャリアを蓄積していったのですが、転職が訪れたのは今から8年ほど前。先代社長が亡くなり、当時課長だった私に「取締役になってもらえないか」という声がかかりまして。

——社長のこれまでの活躍が認められて、白羽の矢が立ったわけだ。いざその重責を担ってみられて、いかがでしたか。

先代の社長のご息が新社長に就任し、そのサポートに奔走しました。苦労も多かったですが、貴重な経験でしたね。ある時、クライアントが関西国際空港に所有している倉庫が台風で大きな被害を受け、水没してしまうということがありまして。その倉庫には、お客様にお届けするはずだった多くの荷物が保管されていたんです。クライアントの社長自ら作業を着て再梱包の作業に当たる中、私も夏季休暇返上ですぐに現地に向かい、大切な荷物を守るために陣頭指揮をとり

ました。今でもその時の光景は忘れられません。

——優れたリーダーシップを発揮され、会社のためにご尽力してこられたことが窺えます。その後、独立された経緯とは何だったのでしょうか。

周囲からの勧めがあり、独立に踏み切ることになりました。ありがたいことに、「独立するなら応援するから」と言って下さる方が多く、勤務時代にお付き合いのあった金融機関の方からも全面的にサポートしていただいたんです。

——周囲の方が支えたいと思われたのは、社長の誠実なお人柄があったからこそでしょうか。当初はお一人でスタートされて？

はい。個人事業主として仕事を請け負うようになって1カ月ほどが経ったころから法人化の準備を進め、その後法人としての『クライフ・ディー・ファースト』が新たにスタートしました。そんなある時、前勤務先の同僚から「野澤さんのも

とで働かせてもらえないか」と連絡がありました。ちょうど人材を採用して規模を拡大しようと考えていた矢先でしたから受け入れることに。すると、その後も前勤務先の同僚たちから「野澤さんについていきたい」という声をもらうようになったんです。

——社長の人望の厚さが窺えるエピソードですね。それからスタッフさんを受け入れていかれて？

まだ会社としてはスタートしたばかり。一度にすべての人を受け入れるというわけにはいきませんから、数名には「事業が軌道に乗るまでは待ってほしい」と話しました。また、中には勤務先を退職して私のもとに移ることをまだ迷っている者もいたんです。迷うくらいだったら、もう少し今の職場で頑張ってみたらいい——それから覚悟を決めることができたら来てほしいという想いを伝え、理解してもらいました。従業員が私一人だったら、言葉は悪いですが何とでもなるんで

す。けれども私を信じてついてきてくれる人がいる限り、私にはその生活を守る義務があるわけですから、生半可なことは言えません。

——社長の強い責任感と人望力。経営者として必要な資質を兼ね備えておられると言っていいでしょう。実際に独立されてみて良かったとお考えですか？

そうですね。180名ほどのドライバーを抱える前勤務先で取締役として6~7年にわたって経営に携わってきた経験、ノウハウを活かしつつ、多くの人とご縁とタイミングにも恵まれて理想通りに運営できていますから、非常にやり甲斐を感じています。ただ現在は、想定外の新型コロナウイルスの脅威と隣り合わせという状況。そんな中で私共は需要が高まる軽貨物運送ニーズに応えることで活路を見出したいと考えています。まずはこの1年で車両と人材を増やし、勝負をかけていきたいですね。

(2020年6月取材)